

『古今著聞集』の一考察（下）

— 楽人説話をめぐって —

石 本 純 子

—

全七百二十六話から成り立つ『古今著聞集』^(注1)には、同一人物が何度か登場する説話がある。十話以上の説話に登場する人物を、回数が多い順に挙げると表(一)になる。これを見ると、藤原孝道は五番目に登場回数が多い。更に、表(一)に名を見ている十五人中の六人が孝道に関わりを持つ人物であることに気付く。そこで、その六人と孝道との関係を見ていきたい。

藤原孝道は永万二年(一一六六)に生まれ延応元年(一二三九)に没した楽人である。『尊卑分脈』^(注2)から、孝道の一族を抄出したのが表(二)である。孝道の父孝定は、木工権頭、尾張守を務め、妙音院藤原師長の家司であった。孝道自身も木工権頭、尾張守、楽人預を務め、従四位下に至っている。琵琶西流当主孝定の長男として生

まれた孝道は、孝定と妙音院師長とから琵琶樂を伝授され、後にも自らも妙音院の家司として近侍した。

師長と琵琶西流師範家とについて追求された岩佐美代子氏^(注3)が、院政末期、それまでの諸派の樂道をほとんど一身に集大成したのは、太政大臣妙音院師長であった。(中略)中にも撰家一族から出て孝博の嫡子となった孝定とその子孝道、孫孝時を愛して、鎌倉中末期のこの一家の繁榮の基礎を作った。

と述べておられるのは、孝定・孝道・孝時と親子三代が妙音院師長の絶大な庇護のもとにあつたことを指摘されたものである。孝道は音楽家としての才能を伸ばすには充分恵まれた環境にあつたと想像できる。そして、師長の死後は、「演奏の第一人者として活躍すると共に、琵琶の修理・製作にも超脱の技倆を示し、玄上の性を見た」と言われるほど、その専門の道では群を抜いた存在に登り詰めて行つた。

ところで、妙音院師長の家系は表^(註一)の通りであるが、これと表^(註二)とを併せて見ると、孝道の父孝定、孝道の子孝時、孝道の師妙音院師長、師長の父頼長、その兄忠通、頼長の父忠実、忠実の祖父師実という六人の名を見つけることができる。つまり孝道に關係のある人達が、『著聞集』での登場回数が多い人物と一致する。これら孝道をはじめ、孝道に関わる六人の人物は、『著聞集』の編者成季にとつて心惹かれる存在であつたと推測できる。成季は彼らをどのような位置付けていたのであろうか。

『著聞集』の序に「琵琶は賢師の伝ふる所なり」と見えるが、この「賢師」が孝道の子孝時にあたることや、『文机談』巻五に「伊賀守成季、これも孝時か弟子なり」と記されていることなどから、成季の琵琶の師が藤原孝時であることは早くから認められてきた。

この孝時に関しては、五味文彦氏が次のように述べておられる。成季が管絃歌舞の話を求めて、『台記』を読んだのではないかと指摘したが、その『台記』の記主藤原頼長の子師長が孝道の師であつたという事実である。(中略)成季の関心は孝時から孝道をさかのぼり、師長を経て、頼長とその日記『台記』に到達したのであろう。

五味氏の想定に従うと、『著聞集』での登場回数が一番多い人物に藤原頼長があたること、そして頼長の家系に属する人達の登場回数の多いことも納得することができる。五味氏の指摘にあるように「成季は琵琶管絃の道を学び、そこから多くの説話を得たのであつた」としたら、孝時や孝道の説話の内容は、当然管絃に関わるもの

となるであろう。そこで、成季の関心が孝時—孝道—師長とさかのぼつたとされる、その中間点に位置する孝道を中心に、琵琶管絃の世界での彼らの存在を確かめたい。

一

幼少期の孝道については、『文机談』に次のように記されている。

孝道は七歳より百詠をよみ、九歳にてゆみをひく、十一歳より笛をこしにさす、十四歳にてはじめて比巴をまなふ、七月廿一日也、をなしき夜、こと・ひちりき一度にならひはしむ、十九よりみちの大意をこ、ろえて催馬楽・風俗・詠曲などをならふ、その年はじめて後白河院日吉の御幸のありし御遊にまいるめぬ、その後比巴細工をこのみて、おほくの名物をつくらふここにある通り、十九歳の時から琵琶楽人としての自覚を持ち修業に励む孝道は、すでに幼少の頃から様々なことを習い始め、後には琵琶細工にも通じるようになった。

そのような孝道が琵琶を公の場で奏でたことを示す資料として『教訓抄』がある。まず、『教訓抄』二には、

建久九年ノ冬比。仁和寺ノ舍利會ニ皇帝アリ。御室ノ御愛弟ニ金剛ト申ス童二。笛合テキコシメスヘキユヘナリ。序十六拍子。破六帖。普通説。宗賢カ弟子。舞人ハ一者光重ナリ。其時二者ニテ則房カ侍シカ。楽屋ニテ。誰人ノ今日皇帝ヲハ。舞モ吹モスヘク候ソト。孝道琵琶。利秋筈。侍ケルニ向テ云ク。殿原彈

キモ、笙吹セサセ七給ヘシ。則房カ流ノ輩ハ舞ヘシトノ、シリ侍ケレトモ。一者光童。笛一者宗賢。一切二物モ申サテコソ侍リケレ。(本文につけられた読み仮名等は省き句読点を付けた)とあり、建久九年(一一九八)の冬の仁和寺舍利会で琵琶を担当していたことが分かる。孝道三十三歳のことであった。

また、『教訓抄』十には承元三年(一一〇九)孝道四十四歳の時のことが書かれている。(傍線筆者、以下同じ)

鳥向樂蘇合加拍子事

承元三年十一月七日。殷富門院女院。於安井殿。百日御舍利

講結日。有管絃。笙中納言隆衡。篳篥入道。笛修理大夫。琵琶孝道。

僧一人。打物地下。鞆鼓近久。大鼓近真。鉦鼓光稱。盤涉調。万

秋樂破自半帖。鳥向樂自帖加拍子。(以下略)

これは殷富門院の舍利講結日の管絃の催しに孝道も参加していたことを示している。

さらにその八日後の記事にも孝道が見える。

倍臚扶南加拍子事

同十五日。御室御所。於大聖院之御堂。有御講。笙隆仲少將。

篳篥忠行少將。笛式賢。琵琶國師少將。箏教通。鞆鼓近久。大鼓近眞。

鉦鼓入行。平調忠拍子樂等有其員。倍臚打四拍子説。

ここでも大聖院御堂において行われた講での管絃に、琵琶を弾いた孝道の名が出ている。そして同じく『教訓抄』十の承久四年の条にも五十七歳の孝道が見られる。

鞆鼓事

同四年二月廿八日。於一院。醍醐童舞御覽。高陽院殿。東西御所樂。中門立唐大鼓鉦鼓。屬。關白殿。右大臣公遠。内大臣公經。御簾中。大床帥大納言定輔。四條大納言隆衡。(中略)琵琶右馬頭光俊。木工權頭孝道。兵衛大夫孝時。菊若。。殿上人酒元。但可立禮代。三人東帶。童舞人。

承久四年(一一二二)、孝道・孝時が琵琶楽人として参加した時のことである。『教訓抄』が示している通り、孝道は様々な管絃の催しの場では琵琶を弾きこなせる人物として名を連ねる立場にあったことがわかる。つまり、孝道は琵琶楽において、その名を広めたわけである。

さて、『著聞集』では十四話に登場している孝道であるが、その内、孝時と登場する説話が五話、妙音院師長と登場している話が三話ある。表四にそれぞれの説話を抜き出し示しておく。

孝時とともに登場する説話の中で、五十一23は孝道との親子関係を描いた一話である。「法深房、そのかみ、父の朝臣と不快の比」とあり、法深房孝時が父孝道と不仲だった頃、譲り受けた笛を孝道に取り返されるといふ出来事が起こり、悲しむ孝時は歌を詠み、そのことが機縁となって出家を遂げたという話であるが、この背景には琵琶西流家の相続問題が関係していたと思われる。父孝道は、後妻(仁和寺女房)とその所生である孝経を愛し、孝時を疎んじていた。孝時の灌頂も、二十九歳に至って渋々授けたほどで、相伝の家譜や所領をめぐって争いが絶えなかったようである。琵琶の秘曲を伝えることを灌頂というが、石田百合子氏によれば、孝道の書いた「琵琶灌頂次第」では、この語は真言三部灌頂から来ているもので、三

曲伝授のことを言うときあり、啄木を最も重くし、その次に流泉、そして楊真操を重んじ秘すべきであるという。後白河院の時代からは、啄木を習うことを灌頂というようになり、これを授かつてはじめて琵琶弾きとして血脈に入ることになった。当時琵琶の人々が啄木伝授に目の色をかえたのはこのことによると述べておられる。この灌頂という儀式一つ取り上げても、琵琶の世界のルールの下には、それに対して人々の様々な目論見があったことが窺える。

孝道に関しては、「家督を孝経に譲り、孝時を勸当、相伝の秘譜・楽器・文書類をすべて後妻(注1)所生の孝経と播磨局に与えるなどの挙に出たことから内訌を生じた」と言われていることからも、五―23は琵琶西流という名を背負う芸能家にも名門ゆえに生じる争いがあったことを示している。

この説話では、笛を取り返された孝時の憂え嘆いて詠歌する姿が印象的に描かれているが、十五―47には、その孝時の琵琶に対する並々なぬ思いが伝わってくる描写がある。

法深坊、生年二十のとしより熊野へまうでて、「我が道、もし父の芸におよばずは、すみやかに命をめすべし」とこそ申されけれ。

ここには、自らの命を懸けて父以上の芸の上達を誓う孝時の決意が込められている。このような孝時像の形象には、強い意志で技を磨こうとする孝時に対して孝道以上の評価を与えようとする編者成季の心理が投影されていると考えることができる。成季が、父（孝道）と子（孝時）とを単純に比較しようとしたとは考えられないが、

結果として、自分の師である孝時への思い入れが、説話に込められていたとしても不思議ではないであろう。

もちろん、孝道の琵琶楽における活躍ぶりを語る説話もある。例えば、五―220には、孝道が後鳥羽院の命令で琵琶を製作した話が見える。また十一―394は、後高倉院の時代（院政は一二二一―二三年）に、「勅定」によって造進した琵琶に「孝道」という名が付けられた話である。更に、孝道と琵琶との結び付きを印象づける説話として、十五―496と十五―498とがある。

妙音院師長も登場する十五―496は、孝道がいかに琵琶に執着しているかを物語る話で、後鳥羽院の琵琶の師となつた藤原定輔(注2)との秘曲伝授をめぐる説話である。定輔が師長から秘曲啄木の伝授をうけるといふ噂を聞いた孝道は、食事をせず病気になる。師長は、孝道の不食の原因が定輔への啄木伝授にあると見抜き、「その儀ならば、たしかに物くへ。定輔には約束したれども、経信の流の啄木を教へんずるなり。それは汝(注3)うれへおもふべからず」と言つて、定輔には孝道の流派とは違う桂流の啄木を伝授した。安心した孝道は元気になるが、これ以後孝道と定輔とは犬猿の仲となつてしまった。

この啄木伝授にまつわる話は、『文机談(注4)』にも「孝道作病事」と題して載せられている。琵琶を志す者としてこれだけは人に譲れないという自身と誇りを持った孝道の姿が、定輔との確執を通して窺うことができる。同時に、この説話では、孝道が師である妙音院師長と絶対的な信頼関係にあつたことも明白にされる。琵琶の世界は、伝授という形態をとるため門流が形成され、他の人々が介入するこ

とは難しい。孝道・定輔のように同じ道を志す者同志でさえ、時には対立することもあり、それもまた、その世界に携わる人にしか分からない苦悩であったと思われる。そして、彼らと同じように琵琶を伝習した成季には、孝道と定輔との確執を理解できる部分が大いにあったであろう。十五―496に見える「誠に道を重くせむには、あまたになりて、浅くならむ事は、くち惜しかるべし」という一文も、一つの専門の道が興隆して行く過程において生じざるを得ない問題、たとえば「道への執着」と「家の意識」とが関わる回避できない対立、があるということをも、成季が冷静に見詰めていた証左になるのではないだろうか。

一方、十五―498は行願寺の全舞法橋の臨終の時の話である。全舞は命終の期に孝道のもとへ使者を送り、臨終の際に聴くべき曲と言われている万秋楽を孝道の琵琶で聴きたいと伝える。そして願い通り、全舞は孝道の琵琶を聴きながら果てて行くが、ここでは孝道が全舞にとつての往生の助縁者となっている。このように発心や往生に琵琶の効力が及んでいることから、孝道の琵琶演奏者としての腕が確かなものとして評価されていたことがわかる。と同時に、編者成季が、楽道を往生の機縁となり得るものと認識し、そのことを呈示しようとしたことが窺える。

『著聞集』における孝道を、『文机談』・『教訓抄』と合わせて見てきたが、琵琶楽の分野で名を馳せていた孝道が、十五―496や十五―498のような琵琶に関係する説話の主要人物として登場するのは、当然のことであり、描かれるべくして描かれたと言うこともできよ

う。

そして、成季は、自分が関心を持つ音楽の世界に関して、さまざまな角度から考察を加え、説話として具体的に叙述を展開していく際に、もつともその役割にふさわしい人物として孝道を位置づけたと考えられるのではないだろうか。

二二

音楽家としての孝道の姿は多くの説話に見ることができたが、『著聞集』巻十六「興言利口」篇で語られる孝道は、それまでに描かれてきた琵琶楽人としての彼とは違う。ここからは、巻十六における孝道説話五話（十六―519・540・542・558・559）に焦点を移して彼の姿を追うことにする。

このうち、妙音院師長が登場しているものがある。十六―519は、孝道が若い頃に師長から勘気をうけたという話であるが、この時の師長と孝道とのやり取りは興味深い。師長が孝道の行為を責め咎めるために、鯛を添えた麦飯を孝道に与えたところ、腹を空かせていた孝道は、まずいと言われるその麦飯をたちまち平らげてしまう。そこで次に、「三千三百三十三度のをがみせよ」と命じたところ、食事をして体力を充分につけた孝道は、見事に礼拝をし終えたという話である。結局、師長は「やすからぬものかな。法師は死なばや」と言つて、孝道のこたえない性分に半ば呆れるより外なかつた。この説話には、琵琶の世界における孝道像は全く窺えない。そして、

琵琶の師弟関係を離れた所で二人のやり取りのおかしさがよく出ている一話であり、すぐれた楽人とされてきた孝道の、もう一つ別の横顔が示される説話ともなっている。

次に、十六―540は孝道の容貌を面白く描いている。「孝道は鼻のおほきなれば」とあり、鼻の大きいことでも知られている孝道と頭（出）の大きい七条院権（出）の大夫との歌のやりとりについての話である。

一方、十六―542には、孝道がへひり判官代と呼ばれている人物にその治療法を教えたという話がある。孝道は判官代にからかわれていると思ひ、「しばしこれをこれを大事と、おもふさまにいきづみて、ひられんを期にひらせ給へ」と言うのだが、判官代の方は本気に信じ孝道の言う通りにしたため、今まで以上に放屁するようになってしまったという笑話である。この話は琵琶楽人としての孝道とは全くかけ離れた所に成立しており、楽人孝道とは異なる姿が描出されている。話の中に「孝道、心はやきものにて」という表現があるが、機転に富み、心の動きが素早い孝道であったからこそ、右のような治療法を判官代に教えることができたのであり、孝道の性格・人柄が説話のおもしろさを生み出していると言えよう。

これと類似する説話として、十六―558と十六―559との二話がある。十六―558は、大勢の人が通夜をする嵯峨の釈迦堂で「経には題目となり、仏には眼となる」と得意に朗詠する僧がいたが、その僧に孝道が「おもしろう候ひつるものかな」とお世辞を言ったところ、「心地よげ」に思つた僧が居づまいを正して「これは随分に孝道にならひて候ひしなり」と語つたという話である。この話の面白さは、顔

も知らない孝道を前にして詩句を孝道に習つたと堂々と言つてのける僧の不敵さにある。しかし、あまりに得意気に朗詠する僧に対してお世辞を言った孝道の方が一枚上手であると見ることもでき、まさに「心はやき」孝道の一側面を窺うことができる。

続く十六―559も、そのような孝道の性格を描いている。仁和寺の家で双六の勝負をしていた孝道のもとへ隣の越前房という僧が観戦に来る。しかし越前房があれこれ口出しするの腹が立った孝道は、しばらくして越前房が立つた際、帰るのだと思ひ「この越前房はよきほどのものかな」と嘲罵した。ところが、帰つたと思つていた越前房が自分の後ろに立っていることに気付き、孝道はすぐさま「越前房はたかくもなし。ひきくもなし。よきほどのものな」と言い直す。この説話の末文は「心はやさいとをかしかりけり」と結ばれている。越前房に対する皮肉たつぷりの言葉が本人に聞かれていたと知ると、即座に、見事に言い抜けしてしまう孝道の「心はやさ」が、如実に描き出されている。

以上見てきたように、巻十六「興言利口」篇の孝道は、他巻では見ることのできない私的な「顔」を見え隠れさせている。

琵琶という専門分野以外のことを描いた巻十六の五話に現れ出た孝道の人柄を想像すると、孝道は頭の回転の速い、ユーモアを兼ね備えた生命力にあふれるような人物ではなかつたかと推察できる。それは、公の楽人の顔とは異なる、親近感を覚えさせる顔を持った孝道像と考えることができよう。

橘成季は、音楽説話の主人公の一人として、自分にも由縁のある

孝道という人物に関心を抱き、孝道に関わる説話を類集して行き、その過程で入手した説話の中に見られる孝道の、楽人ではない、もう一つ別の側面に興味を覚え、彼に関する種々の逸話を採集して行ったのではないであろうか。

そして、このように、或る人物への関心から、説話が類集されていくことも、『古今著聞集』生成の工程を考える時には、無視できないことではないかと考える。

注

- (1) 全七百二十六話には、抄入追記されたとされている約八十話が含まれている。
- (2) 『尊卑分脈』(増補改訂・国史大系)
- (3) 岩佐美代子『音楽史の中の京極派歌人達―琵琶・箏伝授系譜による考察―』(『和歌文学研究』・第37号・昭和52年9月30日)。
- (4) 注(3)に同じ。
- (5) 注(2)に同じ。
- (6) 『文机談』菊亭本・伏見宮本(古典文庫)。以下の引用もこの本による。
- (7) 五味文彦『古今著聞集と橘成季(上・下)』(『古代文化』・第37巻第11号・昭和60年11月20日、第38巻第1号・昭和61年1月20日)。
- (8) 『教訓抄』(日本古典全集)

(9) 注(3)に同じ。

(10) 石田百合子『藤原孝道略伝』(『国文学論集十五』上智大学国文学会・昭和56年1月16日)。

(11) 相馬万理子『文机談』(『解説』(古典文庫))。

(12) 藤原定輔(一一六三―一二二七)。中納言親信の子。建久二年(一一九二)参議となり、修理大夫・左兵衛督・檢非違使別当等を歴任し、承元三年(一二〇九)権大納言に至る。詩歌・蹴鞠・琵琶に堪能で、琵琶は孝道と同じく師長に師事した。

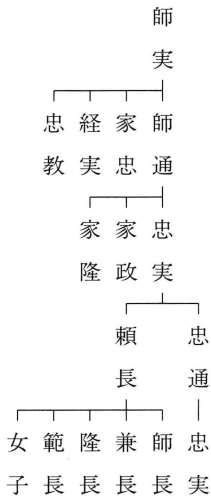
(13) 桂流は、源経信が伝える弾じ方。この経信流と藤原孝博の伝える孝博流との二流派があり、師長は両方の流派を伝習していた。

(14) 『文机談』第四冊・巻四(二条定輔―後鳥羽院)〔古典文庫、177・178頁〕

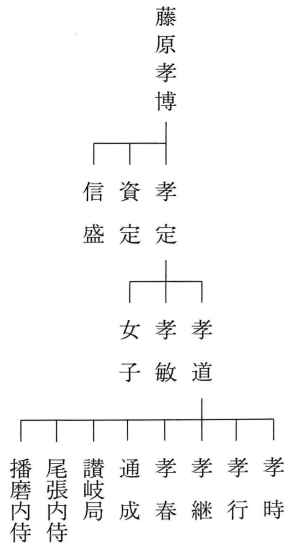
(15) 『著聞集』十九―664に、鼻の大きい孝道一族が「鼻が党」と呼ばれていたという話がある。

本稿は、平成七年一月十七日提出の卒業論文(全三章)の第二章を中心に改稿したものです。卒業論文作成にあたり御指導賜った谷垣伊太雄先生、ならびに、改稿に際して御助言いただいた田中宗博先生に、心より御礼申し上げます。

表(三)



表(二)



表(四)

孝道・師長	孝道・孝時	孝道
十五 ↓ 496	三 ↓ 105	五 ↓ 220
十六 ↓ 519	五 ↓ 223	十一 ↓ 394
十六 ↓ 558	十一 ↓ 402	十五 ↓ 498
	十五 ↓ 497	十六 ↓ 540
	十九 ↓ 664	十六 ↓ 542
		十六 ↓ 559
3	5	6話